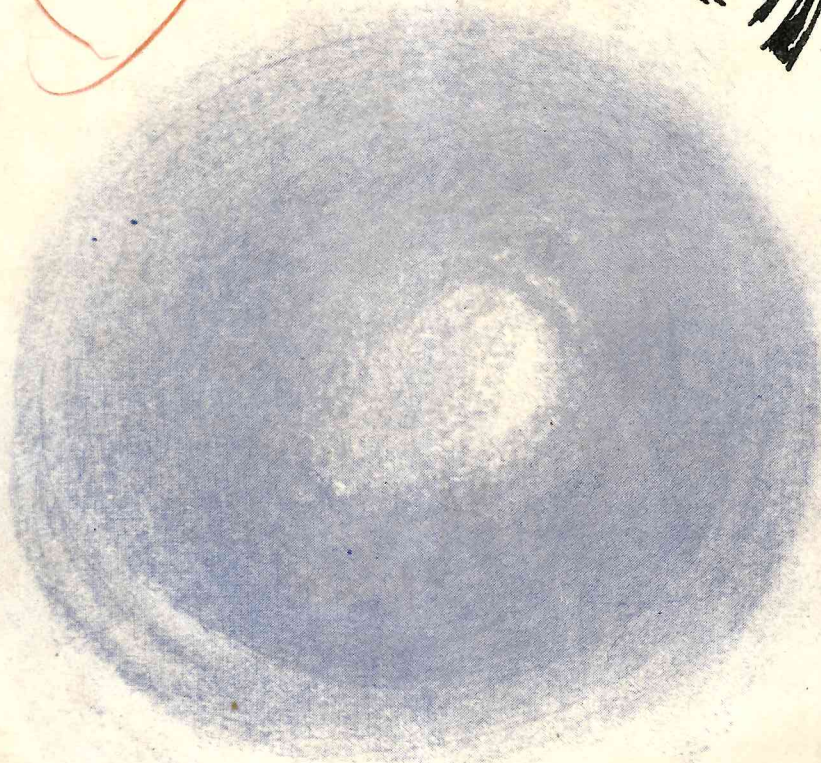


薔薇

1967-1
第九回薔薇賞発表



昭和四十二年一月二十日発行
西宮市北口町五十七番地
電話西宮 67-1539・振替大阪三六四〇六

薔薇短歌会略規

- 本会は短歌を中心とする文芸結社で隔月雑誌「薔薇」を刊行し会員に頒布する
- 本会は村上新太郎が主宰す
- 会費 A (同人) 一年 三六〇〇円
- B (準同人) " 二四〇〇円
- C (会員) " 一二〇〇円
- D (購読会員) " 六〇〇円
- なるべく三カ月以上前納の事
- 長期療養者並学生にして申出あれば半額とする
- 詠草 (二十首) 原稿紙使用のこと
- 原稿次号締切 二月二十日
- 添削・一回十首以内添削料二〇〇円
- 宛名明記切手貼附の返送封筒同封の事

昭和四十二年一月二十日発行

編集発行者 村上新太郎

西宮市北口町五十七番地

発行所 薔薇短歌会

振替大阪三六四〇六番

電話西宮 67-1539番

大阪市都島区高倉町三ノ二

大阪版

安 藤 葉 局

電話大阪 67-1539番

印刷・株式会社スーパード印刷

No.87



第八十七号目次 (一九六七年一月)

篋底雑記(7)	村上 新太郎	1
作 品	村上 新太郎	2
心にのこる歌とその人々	〃	8
作 品 十五首	松村 衣栄	11
〃 二十首	池田 田鶴子	15
〃 二十首	坂本 勝子	16
歌集へ石牀の歌へ評	奥道 裕彦	17
随筆集「一蒼亭」評	松村 衣栄	19
黄 薔 薇 集	城 村 しづ	20
美しき邂逅(随筆)	吉見 芳子	22
作 品 I	米山 千賀	24
自 歌 自 釈	植田 多重子	33
ロダン展(二十六首)	安藤 佳光	36
作 品 II	安部 喜久栄	37
薔薇作品鑑賞	小川 泰子	43
第九回薔薇賞作品	西本 宗秋	28
・選考経過	平井一雄・山田木味	29
・所 感		30

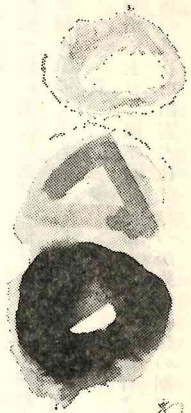
賀 春

丁未元旦

村上 新太郎
編集部 一同

■ 薔薇春の短歌大会予告

時・昭和42年4月9日(第二日曜)
場所・兵庫県篠山町 青山会館
交通其他の詳細は次号にて御知らせします。
今から心ずもりを願います。



薔薇 No.87

表紙・カット：竹中 和太郎
〃 須田 勉

篋底雑記 その七

デパートの書籍の前に立って高校生が立ち読みをはじめめる。

* 「春はあけぼの、やうやう白くなりゆく山ぎわ、少しあかりて、紫たちたる雲の細くたなびきたる。——」

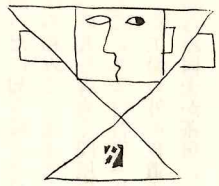
* 枕草紙第一章「おい、ここを覚えておこうよ、ここを……」と云って、もう一人に呼びかける。

* わけがわからなくともよい。日本の古典は棒読みからはじめる。

* 君がやがて三十になり、四十になり、ふりかえる日本

* そのとき、ボウ読みがよみがえる。うるわし日本、日本の国語。

(村上 新太郎)



心にのこる歌とその人々

—ローマン短歌など—

村上 新太郎

ローマンの残党 私に對してときどきローマンの残党という名譽ある？ ニックネームを賜わる。どんなつもりかしらないが、かつて華やかなりしものが今はほろびに在る意味であろうか。もう文句は言うまい。ありがたいことだ。だが想えば私にそんなはなやかな日があつたかどうか。

春を留むるに春佳よしとならず、春帰はるかへつて人寂漠とろとろたり、風を厭いとふに風定しづまらず、風起かぜつて花はな蕭索せうさくたり。(白氏)

今はただ爺おやくさいおもいでである。私に對してそんなイメージがあるとすれば、かつてローマン主義に魅力を感じ作歌して来たまぼろしのようなものへの参照としてい

うか。改まってローマン主義などと声高こゝろくいう必要はない。もうすべてが面倒めんどうくさいのである。だからといって浪漫の精神が消えうせたとも思っていない。保田与重郎氏などは日本浪漫派とはっきりした旗印をたてて述志の行動に出られたのだから、自分をローマン人としていられたのはあたり前だが、自分からローマン人だと名のつて仕事をした人はほとんどないのではないか。

いまは思想が混乱こんらんしていて、言わばよるべき時代と言えぬこともない。だからたとえリアリズムを主張している写生派にしてもジャンルでなく、各々がこの混沌こん沌の中で苦しんでいる。残念なことだがこれが現状であり現

代のかなしみはそんなところにある。

十八世紀末から十九世紀の始めにかけてあつた華々しい西欧のロマンチズム、明治二十年から三十四、五年までの日本浪漫主義時代、荷風、潤一郎、春夫らの新浪漫主義、白秋、李太郎らの耽美派、さては戦時中の日本浪漫派までを含めて、これを歴史的に見ることにすれば、かつての現象と現在のロマンの心を区別して考えて見てもよいのではないか。私は時々ふと考えるのだが、ロマンに對してはただ過ぎ去つた現象だとか、定義のよくなるのを勉強して来たのみで、何をつかんで来たのだろうかと思ふのである。結局なんにも解とちやいないのである。ただ

まぼろしのようなものをつかもうとしていた姿を感じるのみである。(思想だけをつかもうとするものは、どんな思想でもこんなことで了しまるのではあるまいか)。それは要するに生まれ出た作品、行動に対する概念的な名づけである。だから歌を作つたり、いささかでも文筆に手をそめている人の心にはこうしたロマン精神が色んな象となつていつまでも消えずに揺曳ゆゑしていると思ふ。ただそれを感じるか、感じないかの違いである。

リアリズムは飽あくまで法方論ほほうろんであつて、そこに何らかの心的な能動を必要とする。その精神をさらに詳細に分析すると、詩歌するものが必ず持たなければならぬものに突き当たる根源的なもの、これを人間の抒情とすれば、その抒情にローマン的なエネルギーが加わるか否かによつて詩歌の境がきまるといふものだ。しかし、今日の政治の貧困もさることながら、現代詩歌衰弱の因にはいろいろあるが、その中の一番大きな一つ、精神文化が物質文化に負けているということ、例えば、電子頭脳のような知能の競争に對し、精神面の停滞衰弱が甚だしい。このアンバランスが断層となつてい

さ)。このマス・シヴィリゼーションの中にあつて人々は何かに頼ろうとしている。何かがあるだろう。何かを待望する。他力一辺である。思えば吾々が如何に忠実な愚衆であるかにつぎ。この憧憬のない日々を見て云えることは、吾等一人一人が恰も丈高き為政者のころ(熱情)を持って超えてゆくこと、それが興るべきロマンチズムに通じるのではなからうか。

吉野山去年のしをりの道かえてまた見むか
たの花を尋ねむ 西行

あきひとの娘のうた一首 草原があればそ

こに寝、赤とんぼが飛んでくればつかまえずうとする、そんなナイヴな思ひをもう一度ふりかえてみるもよい。昭和二十八年四月和歌山の西保恵以子さんから「二十一歳」という臙脂おんじの和紙で装釘した、蕭洒な歌集をいただいた。序文は田中克己さんが書いていられる。(田中さんについては後で述べたいと思ふ)田中さんとはいつのほどにか、前川佐美雄君に紹介されてから今でも親しくしてらつてい

さんは成城大学教授)先ず序文の最初のことろを記しておこう。

「去年(二十七年)春から教えることになつた学生のひとり、図書室で私に歌を見せてくれといつて示した。この学生が「二十一歳」の著者西保恵以子君で、その時の歌は

平凡に商家の妻となりゆくを定めたる日は
泣きにけるかも

というのであつた。私はこの歌をよんで少なからず感動した。」また「私は西保嬢のみせてくれたどの歌をも批評し、添削することはなかつたが(山陰だより)に見える歌を示されたときだけはこういつた。風景だけで歌になるかなあ、これを悉するひとの歌にかえたらどうだろう。」

この短歌観をもつ田中さんの念いが多感な二十一歳の恵以子さんに如何に影響を与えたか。西保さんは大阪船場の商家の生まれで戦災に遭ひ和歌山へ引越された。「うすもの花を散らせし祭ぎぬ幼な衣裳も戦火に果てし」
「はじらひもなく焼けざりし親戚にシャツをもらひにゆきし父はも」のような切ない歌が数々ある。恵以子さんは光源氏のあの夢のよ

うな一生を心に描き高雅な理想をフィクションの中に去来させ、ひそかにそれを歌にしたかったと述べている。更級日記のうら若き乙女は源氏物語五十余帖を叔母からいただき「得てかへる心ちの嬉しさぞいみじきや。はしるはしる、わづかに見つつ、心も得ず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちに打ち臥して引き出でつつ見る心ち、後の位も何かはせむ。」(いただいて帰るたとえようのない嬉しさ、今まで飛び飛びにだけ読んでいたので、よく意味が解らず、心もとなく思っていた源氏物語を始めの一卷から、ほかの人もまじえず(一人して)几帳の中にひきこもって、臥しながら読む心もち、たとえ皇后の位をやろうと言われても、ほしく思わない。)と乙女心をたかぶらしている。恵以子さんもこれに似た思いで、このような物語の雰囲気浸って、きびしい現実の中で、フィクションを求めたのである。

にぎりたる砂かるやかに落つる音言たえし
間はかく慰まむ
ひとたびは告げなむとしていひよどみいひ
そびれたる少女のおもひ

吾に来てリルケの詩をばよみくれしきみともながく逢はずなりにし
ふと思ふ山さみだるる五月にて遠き日は何を歎きむにけむ
一すじに続く街路をゆくきみの白きかすりをおもひそめにし
身の不幸さらさら吾は思はざり思はざるときにひそむかなし
たいいていの女のうたは皆うまくなつた。そしてかしくもなつた。しかしあわれやかなしみはうすれゆきつつある。それを心ある女人は知っているに違いない。知っているけれどそれを純粹にうち出せないのである。過敏な人ほどの想いが深いのである。今日の女うたの何れかには常に平凡なしあわせでありたいとする言葉が匿されている。けれど歎きはますます遠ざけられている。四十、五十、六十と次第にかしく、さどくなつてゆく、男性もこの例外ではないが、女性を見ると遂にそう思うのである。女うたのほろびはすでに言われたことだが、「いまは盛んです」と言いつつ背筋は寒いのである。
きよなる思ひは二つ三つありしこの春の日
に二十歳をこゆる

「春のうた」の中の一詩、きよなる思ひの発想には何の用意もなく、ためらいもない。かくも大胆に打ち出せた力をうれしく思うのである。年を積むという言葉の中には濁りが常にふくまれている。その中から澄んだいのちだけを汲みあげ汲みあげ詠ってゆかねばならぬ。それが歌よみの道である。二十歳という思索の幼さはあつても、今日の二十歳と違つて濃度の濃いものがある。一人の憧憬と心の郷愁を西保さんのうたにもつものは私一人だけであろうか。無知にも近い現代女性の開放感からは何が生まれてゆくのであろうか、何も生まれやしない。
私がかつて薔薇十四号に「商人の娘の歌一首」としてこの集を紹介したことがある。少し長くなるが再録してみよう。
川に浮くネオンの街の商人の娘と生れきし
かなしきをもつ
かはにうくネオンのまのあきひとのこと
うまれきしかなしきをもつ
と仮名書きにしてみた。歌筋がシッカリ透っている。歌はやはりシンナリした中にもシッカリしたがが一本通っていないければいけない。この歌何処となく情の細やかさがあ

って人の心を温める。晶子の少女時代はどんなだつたらうかと一寸事大に考えても見る。もしもこの人が平城か藤原の御宇にいたら、商人の娘の歌一首として万葉に召されていたかも知れない。などと私の夢を発展させます。私はこの集を何の苦なく素通りした。そしていささか甘い感傷を感じた。恰も一日節煙して煙草を喫った時の様に。——私の年齢ももう長けている。芸術する心には年齢はない。などとは思つていても九十%以上は負けている。集の歌を読んでゆくと、利玄を感じ、晶子を感じ、啄木を感じ、ささめ雪(潤一郎の)を感じた。それが私に淡い郷愁を与えたのだ。それは模倣であつてもかまわない。和泉式部でも式内親王でも赤染衛門でも何でもまねて見るがよい。自分の身について行けばよいのだ。それが西保さんのスタイルとなる。だが器用は中絶しやすい。そんな事のない様に、悪い歌心にも染まぬ様にいつまでも燃えていてほしいと思つた。
さからはず従ふ日々よわが性にたのむ強さ
も崩れゆくらし
遠き日の何につながる思ひ出か巻貝一つに
ぶき光もつ

わが思慕のなかにまもられるる人のけがさるるなきふかき瞳よ
そむきたる吾をにくしむことのなきやさしき人をときにあはれむ
これらはもはや思い出になつて歌となつた。しかし古代から永遠につながる抒情詩の世界は年を重ねても常に若々しく常に色あせず続くものである。
*
「みどり抄」 神鹿の角切りが終わると、奈良ももうすっかり秋に入る。
坂上に佇み思へばいにしへも寂しき人は山辺に住みき
撞く鐘の余韻のながき日ぐれどき頭を低く鹿ゆく紅葉
「風蕭々たる冬木立の中に立つ鹿の孤独と野性を迫真力をもつて描いたのは菱田春草だった。紅葉とシカのとりあわせを発想した最初の画人はほめられてよい」晩秋初冬の奈良のおもいを吉村正一郎氏は斯く云っていた。「頭を低く鹿ゆく」の向寒季の佇しきは奈良人だけでなく網膜にうつる。いや、奈良に住んでいるものは一層味気ないのである。
前川緑さんの第一歌集「みどり抄」は昭和

二十七年十月に出た。昭和十一年から二十七年の作三〇七首。扉の挿絵ベトルス・クリスタスの和蘭陀の少女像を見て、私はすぐ緑さんの顔を思い出した。この気品のある少女像は秋草のようにシットリと、しかも若々しい。そして思索型である。この絵を見て緑さんの顔を知っている人は皆感じたに違いない。おそらく歌集を出すときまで緑さんはこの絵を胸中秘かに温めていたのではなからうか。ものを蔵つておこうとする女の気持、殊に日本伝統の女性の習性は何にもましてつましく床しいものだ。緑さんはどちらかというと口数の少ない質だ。それは要らない言葉をいわないのであつて、空白を挨拶やお世辞でごまかさな。空白をそのままにしておく技巧でも謙遜でもないありのままだ。だから云おうと思えば露骨に関西弁でどしどし云う。それも相手次第だ。
「みどり抄」にはその空白感がただよっている。誰もよせつけないのではない。このよきを知るものみにある歌集だ。(この頃云つてもしようのない言葉が多すぎる。)高雅な歌ほど空白がある。かりに古代歌謡を見てもこの感が深い。

うな一生を心に描き高雅な理想をフィクションの中に去来させ、ひそかにそれを歌にしたかったと述べている。更級日記のうら若き乙女は源氏物語五十余帖を叔母からいただき「得てかへる心ちの嬉しさぞいみじきや。はしるはしる、わづかに見つつ、心も得ず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちに打ち臥して引き出でつつ見る心ち、後の位も何かはせむ。」(いただいて帰るたとえようのない嬉しさ、今まで飛び飛びにだけ読んでいたので、よく意味が解らず、心もとなく思っていた源氏物語を始めの一卷から、ほかの人もまじえず(一人して)几帳の中にひきこもって、臥しながら読む心もち、たとえ皇后の位をやろうと言われても、ほしく思わない。)と乙女心をたかぶらしている。恵以子さんもこれに似た思いで、このような物語の雰囲気浸って、きびしい現実の中で、フィクションを求めたのである。

にぎりたる砂かるやかに落つる音言たえし
間はかく慰まむ
ひとたびは告げなむとしていひよどみいひ
そびれたる少女のおもひ

吾に來てリルケの詩をばよみくれしきみともながく逢はずなりにし
ふと思ふ山さみだるる五月にて遠き日は何を歎きむにけむ
一すじに続く街路をゆくきみの白きかすりをおもひそめにし
身の不幸さらさら吾は思はざり思はざるときにひそむかなし

たいの女のうたは皆うまくなつた。そしてかしくもなつた。しかしあわれやかなしみはうすれゆきつつある。それを心ある女人は知っているに違いない。知っているけれどそれを純粹にうち出せないのである。過敏な人ほどこの想いが深いのである。今日の女うたの何れかには常に平凡なしあわせでありたいとする言葉が匿されている。けれど歎きはますます遠ざけられている。四十、五十、六十と次第にかしく、さどくなつてゆく、男性もこの例外ではないが、女性を見ると遂にそう思うのである。女うたのほろびはすでに言われたことだが、「いまは盛んです」と言いつつ背筋は寒いのである。

きよなる思ひは二つ三つありしこの春の
日に二十歳をこゆる

「春のうた」の中の一、きよなる思ひの発想には何の用意もなく、ためらいもない。かくも大胆に打ち出せた力をうれしく思うのである。年を積むという言葉の中には濁りが常にくまれている。その中から澄んだいのちだけを汲みあげ汲みあげ詠つてゆかねばならぬ。それが歌よみの道である。二十歳という思索の幼さはあつても、今日の二十歳と違って濃度の濃いものがある。一人の憧憬と心の郷愁を西保さんのうたにもつものは私一人だけであろうか。無知にも近い現代女性の開放感からは何が生まれてゆくのであろうか、何も生まれやしない。

私がかつて薔薇十四号に「商人の娘の歌一首」としてこの集を紹介したことがある。少し長くなるが再録してみよう。
川に浮くネオンの街の商人の娘と生れきしかなしをもつ
かはにうくネオンのまのあきひとのこと
うまれきしかなしをもつ
と仮名書きにしてみた。歌筋がシッカリ透っている。歌はやはりシンナリした中にもシッカリしたが一本通っていないければいけない。この歌何処となく情の細やかさがあ

つて人の心を温める。晶子の少女時代はどんなだったろうかと一寸事大に考えても見る。もしもこの人が平城か藤原の御宇にいたら、商人の娘の歌一首として万葉に召されていたかも知れない。などと私の夢を展覧さす。私はこの集を何の苦なく素通りした。そしていささか甘い感傷を感じた。恰も一日節煙して煙草を喫った時の様に。——私の年齢ももう長けている。芸術する心には年齢はない。などとは思っている。九十%以上は負けている。集の歌を読んでゆくと、利玄を感じ、晶子を感じ、啄木を感じ、ささめ雪(潤一郎の)を感じた。それが私に淡い郷愁を与えたのだ。それは模倣であつてもかまわない。和泉式部でも式内親王でも赤染衛門でも何でもまねて見るがよい。自分の身について行けばよいのだ。それが西保さんのスタイルとなる。だが器用は中絶しやすい。そんな事のない様に、悪い歌心にも染まぬ様にいつまでも燃えていてほしいと思つた。

さからはず従ふ日々よわが性にたのむ強さも崩れゆくらし
遠き日の何につながらる思ひ出か巻貝一つに
ぶき光もつ

わが思慕のなかにまもられる人のけがさるるなきふかき瞳よ
そむきたる吾をにくしむことのなきやさしき人をときにあはれむ
これらはもはや思い出になつて歌となつた。しかし古代から永遠になつてくる抒情詩の世界は年を重ねても常に若々しく常に色あせず続くものである。

「みどり抄」 神鹿の角切りが終わると、奈良ももうすっかり秋に入る。
坂上に佇み思へばいにしへも寂しき人は山辺に住みき
撞く鐘の余韻のながき日ぐれどき頭を低く鹿ゆく紅葉

「風蕭々たる冬木立の中に立つ鹿の孤独と野性を追真力をもつて描いたのは斐田春草だった。紅葉とシカのとらあわせを発想した最初のおもひを吉村正一郎氏は斯く云っていた。
「頭を低く鹿ゆく」の向寒季の化しは奈良人でなくとも網膜にうつる。いや、奈良に住んでいるものは一層味気ないのである。
前川緑さんの第一歌集「みどり抄」は昭和

二十七年十月に出た。昭和十一年から二十七年の作三〇七首。扉の挿絵ベトルス・クリスタスの和蘭陀の少女像を見て、私はすぐ緑さんの顔を思い出した。この気品のある少女像は秋草のようにシットリと、しかも若々しい。そして思索型である。この絵を見て緑さんの顔を知っている人は皆感したに違いない。おそらく歌集を出すときまで緑さんはこの絵を胸中秘かに温めていたのではなからうか。ものを蔵つておこうとする女の気持、殊に日本伝統の女性の習性は何にもましてつましく床しいものだ。緑さんはどちらかという口数の少ない質だ。それは要らない言葉をいわないのであつて、空白を挨拶やお世辞でこまかささない。空白をそのままにしておく技巧でも謙遜でもないありのままだ。だから云おうと思えば露骨に関西弁でどしどし云う。それも相手次第だ。

「みどり抄」にはその空白感がただよっている。誰もよせつけけないのではない。このよきを知るものみにある歌集だ。(この頃云つてもしようのない言葉が多すぎる。)高雅な歌ほど空白がある。かりに古代歌謡を見てもこの感が深い。

ひさかたの天の香具山 利鎌に さ渡る
鶺鴒 弱細 手弱腕を 纏かむとは 吾はす
れど さ寝むとは 吾は思へど 汝が着せ
る襲のすそに、月立ちにけり (古事記)
の澄み透った空白感を忘れてはならない。ヤ
マトタケルの「白鳥」の神話は同時に歌物語
である。「竹取物語」や「伊勢物語」のあの
品のよい素朴の源流にはこの空白がどれほど
太々しく流れているかを感じないわけにはい
かない。

円柱に吹きか流らふ風のひびき吾がきく耳
に越えてゆく寺 (唐招提寺)

この庭に思ひもかけぬ手紙きぬさやさや白
く雪の降る庭

二上山に雪は降りつつあなかなし今日のこ
ころは言ひがたきかな

秋立つや両の手のいろ石のいろ井戸の屋形
に下りある小鳥

これらには何かもつと言いたいことを押さ
えている静けさがある。透明体の底に炎えて
いる閑雅は、やかましい音の現代技巧短歌を
冷たく見下しているようにも思う。素朴でい
たいけな詠みぶりは古事記の歌謡が持つ、或
は言葉たりないような空白感(間)のこころ

が秘かに流れていると見てもよい。はげしい
歴史の裏付けをもつ古歌と比較すれば、これ
らはあるいは無傷の境でもあろう。また無傷
のように粧っているのかもしれない。だが無傷
の中から汲みとることもむづかしい。「青丹
よし」のあの枕言葉には意味があるのかない
のか、あのきらびやかなひびきはたしかに無
傷の美である。

緑さんはいままでたつても乙女妻のおもか
げがある。成人した一男一女の母として見る
よりは常若の乙女歌人という方がまさって
る。

わが少女笛を吹く円影よりぞひろがりて
ゆくやさしき絶望

方広き庭の真中の石だたみ黄金の灯笼の笛
吹く天人 (東大寺)

わが子等が清き眼をして笑み来ればおち傾
きし玻璃すきとほる

美しきひと立ちたまふと思ひしもわが眼の
とどく空間なりき

寒風に素足さらして行く童われたふるとき
もわらべよ走れ

深いかなしみがあるのか無いのか、しかし
それらを普通人の世の言葉で言うのはたやす
い。無垢な詩心のみが要約しそれに応える。
瞳が涼しく澄み透って見えてこそ詠えるの
である。

桐箆筒の戸を閉づる音からく澄みこころま
どはす桐の戸の音

「このように変っているのを見ると、ただ
驚くばかりだった。この人はその瞬間——
心まどはす桐戸の音に、何を考えているの
だろうか。歌も心も危いこの一線で、ただ
歌が世界をおほっているように見える。こ
のような歌の世界があることを誰が知って
いただろうか。こういう歌は作った人より
も、見つけ出し口吟した者の方がうれしい
のである。」

保田与重郎さんの跋文を見て、私も同じよ
うな思いをする。「こころまどはす」女心の
寂けさと軽い怪訝な心理の微かさは決して些
事ではない。女の世界の要約と深さがある。
誰も知るまいと思っている心がこんなところ
にもあることを示す。

年々にわが夢失せて山を焼く煙の色も寒き
如月

君が辺に十年は過ぎてたまゆらを遊びしこ
とし今日のかなしみ

夢も何もかも失せてゆく、永いと思ってい
た十年もすぎた。それから今は更に二十年も
すぎた。私はこの作者を鴛鴦の肇めより知っ
ているからこれらの歌に並々ならぬ感動と感
慨がある。「たまゆらを遊びしことし」の詠
歎は人のこらえた幽かな息つかいでである。誰
も彼も夢はうすれてゆくはかなきは呼べど応
えぬ月日の迅さである。

浅茅原野を野のかぎり鳴く虫のあらたまひ
びき夜の原に坐す

亀井勝一郎氏は序文で「昭和十二年日華事
変の起る日、この戦いがこんなかたちで緑夫
人の心に投影したことを私は興味ふかく思っ
た。或はその日附がなければ、この歌は一種
の凄さを帯びた女人のやぶれかぶれの気持を
あらわしている」ともとれる。と言っている
が、「みどり抄」の歌の多くは戦中からのもの
、即ち「鳥のゆく空」百五十一首は昭和十
一年から二十二年まで、「草花帖」五十九首
は二十二年から二十五年まで、「陽の真下」
九十七首は二十五年から二十七年までとなっ
ている。思えば鬱深い、かつてない陰惨な明

け暮れであった。その気で見れば先に私が云
った無傷という言葉は取り消さねばならな
い。しかしまたこの暗々たる日々を、斯くも
淡々と詠った倭乙女の美しい平然さは、この
後永い歴史の中の女歌として久しく残るもの
と思う。佐美雄君も目をとおしたであろうこ
の歌集の高雅な匂いは、深く深く滲むものを
もっている。

われのみが知るにあらねど曼珠沙華咲く古
寺のの白き面 佐美雄

私は何とはなしに比翼連理の美しいイメー
ジを感じるのである。 — 未完 —

■ 近刊予告 ■

村上 新太郎 著

歌集 緑夜

第三歌集として上梓・目次抜萃・〈吉野〉〈紅葉集〉

〈出雲〉〈くれぐれのうた〉〈春怨〉〈朝の虹〉〈わ

が冬の日に〉〈冬のかなしみ〉〈落花しきり〉等・B

6判上製函入・約三九〇首・価八〇〇円 千七〇円・

初音書房刊・申込所・薔薇短歌会

オートメーションは
チエンで

各種伝導作業用チエン



中央連鎖株式会社

・高木天青・

大阪市北区浪花町150
TEL (361) 3807

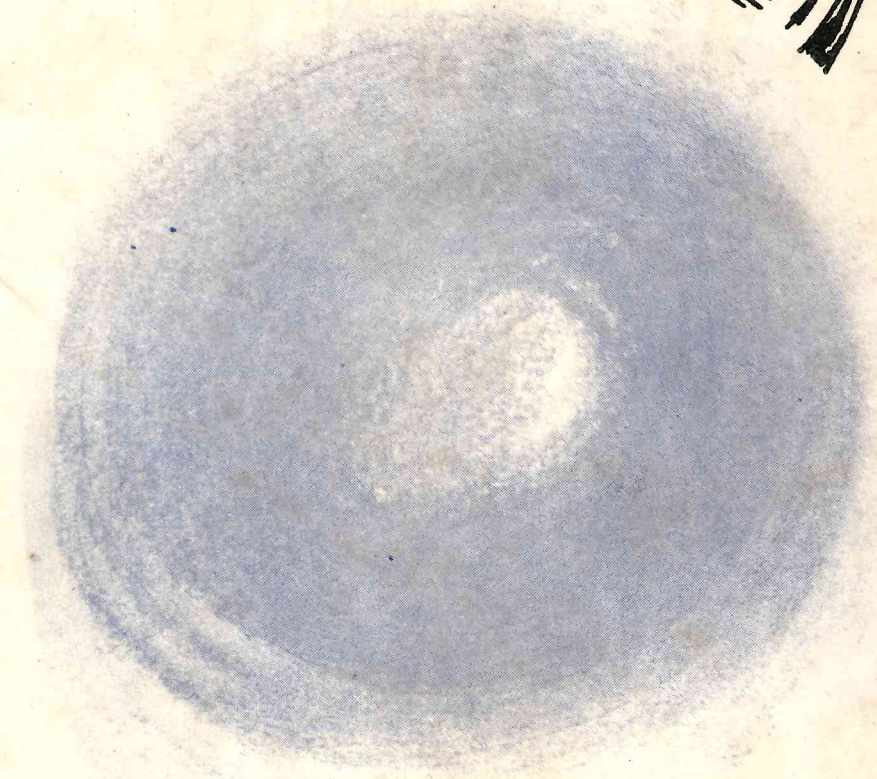
短歌雑誌 薔薇 第88号 昭和42年3月20日発行 (隔月刊)

村上 新太郎 編集

薔薇

1967 - 3

No. 88



編集発行者・村上新太郎・発行所・西宮市北口町五七・電話西宮(67)一五三九・振替大阪三六四〇六・



第八十八号目次 (一九六七年三月)

籓底雑記(8)	村上 新太郎	1
作 品	村上 新太郎	2
公任卿と女房文学	松山 ちよ	8
作 品 I	坂本 勝子	11
心にのこる歌とその人々	村上 新太郎	14
少年記(二十二首)	奥道 裕彦	19
ぬばたまの詩 ^{うた}	柚木 伸一	20
黄 薔 薇 集	山下 高子	22
「明日を責む」評	西本 宗秋	24
ミロ頰(二十五首)	安藤 佳光	26
野葡萄の歌によせて	大倉 はる子	27
余寒(二十二首)	渡辺 郁夫	28
散漫の賦(二十七首)	能勢 みどり	29
作 品 II	山本 貞枝	30
薔薇作品鑑賞	吉見 芳子	35
自 歌 自 釈	平井 一雄	38
薔薇新年歌会記	渡辺 郁夫	41

表紙・カット……竹
// カット……津田高中 剋和 太郎

■ 薔薇春の短歌大会御案内

時・昭和42年4月9日(第二日曜)午後一時より

詠草・一首持参

場所・兵庫県篠山町

青 山 会 館

交通・大阪並に京阪神方面より参加される方は左の時間表によられるよう

福知山線下り

山口着	篠山	三田	宝塚	大阪
1107	1222	1043	1053	945
1309	1414	1143	1051	1005
1414	1518	1226	1148	1148
1518		1322	1416	急1350
		1447		

篠山口下車

バス篠山町行にて二階町下車

○ 当日歌会は四時頃終了

○ 宿泊・歌会后、高台の遠望よき

国民宿舎「さゝ山荘」にて一泊

翌日午後解散の予定

○ 宿泊費 約一〇〇〇円



薔薇 No.88

籓 底 雑 記 その八

新しさを目ざすのもよいが、古きを噛みしめることもよ。

噛みしめ足りないことはあっても、噛み過ぎることはない。

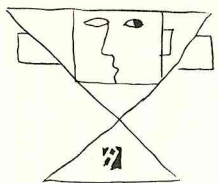
我意を得たりと思っても、新しくも何ともなかったことに気付くことがある。

だが、いきなり新しさに飛びこむ勇気もなくてはいけない。

古きが原動力となった時、新しさは本物に近づく。

温故知新と云うけれど、真の新を誰か知る。

(村上新太郎)



心にのこる歌とその人々

—ローマン短歌など—

村上 新太郎

詩集 悲歌

なれをこひしと帰り来しわれにはあらず
この子らのためにもあらず しかはあれど
なつめ林の土となり帰らざりせば
世をあけておのれひとりのためにゆく
国にのこりしなんぢらがいかがなりしか
思ふだににかりにわが手ふるふなる

田中克己さんが昭和三十一年十一月出された詩集悲歌のはじめにある詩である。「敗戦とはかきざらずいづどこでも不幸な詩人にふさはしい悲歌である」と著者はしるし、いかりとかなしみがのべられている。この詩集の

なり、書くべきだと思つてゐる。

いのちあらばまたかへり見んあつま路の小
夜の中山越えし日のこと」

これを見ると現在田中さんにある詩心の来がはつきりするだろう。歌人にしろ詩人にしろ水の月日のうちには色んな幻滅や感激に逢つて、ふくれ上がつたり、沈んだりするものだ。それがあたり前かも知れぬ。またこの潔癖さがなくては詩は書けない。こんなことを書きながら私はついに田中さんと語らず、ほんの外貌だけを照会して終わるような心細さを感じる。

詩集悲歌の奥書に出ている田中さんの著作は左の通りで

詩集西康省、詩集大陸遠望、詩集神軍、詩集南の星、歌集戦後吟、楊貴妃とクレオパトラ、李太白、ハイネ詩集、李白（鑑賞世界名詩選）ハイネ恋愛詩集

この他、ノヴァーリス「青い花」~~（未完）~~
白楽天（漢詩大系）など広いレパートリーである。（田中さんは東大文学部東洋史科専攻）

またいま思い出したが薔薇の初期には大阪

邦

出版記念会は同年十一月十八日大阪中央公会堂の地下室であった。発起人は井上多喜三郎、小野十三郎、今東光、庄野英二、長沖一前川佐美雄、小高根二郎氏らであり、歌人で出席したのは堀内民一、塚本那雄両君と私ぐらいであった。私はこの時おぼろげながら田中さんを知った。物資の乏しい頃であったためか、この記念会に出されたのは赤白のワインと突き出しだけと言つつましく寂しいものだった。が、私はホンノリした頬を感じながら時雨の巷に消えて行った記憶がある。

田中さんは詩人ぶらない詩人だと思ふ。私はそう云う人をほんとうによい詩人だと思ふ。いやに詩人らしく気取る人は感じのよい馬場町の警視庁クラブと云う、いかめしい名の会場でよく歌会をやった。割合安くて閑静だったが寒々しい感じだった。田中さんがそこへ尋ねて来られたことがある。或はこれが私との初対面であつたかも知れぬ。歌会の席には顔を出されず、別室で少時お話ししたことを覚えてゐる。いささか殺風景なグリの片すみに坐つて「一ぱいどうです」と私は云つたが首を横にふられたため、私はビールを、田中さんはコーヒを、何を話したか忘れてしまったが、そのとき私は瘦身の田中さんを冬の鶴のように感じ何となく飄々とお別れした。その後上京されたまま今日まで会っていない。

去年七月の「新潮」に「四季の人々」（約七〇枚）を書かれた。萩原朔太郎についての一節

「先生（萩原朔太郎のこと）の「恋人」を見たのは、昭和十五年のことか、新宿の呑み屋で働いてゐる女性で、「田中君あの人をどう思ふ」ときかれ、ふしぎがるわたしに先生は「僕の好きな人なのだ」と仰しやうり、「先生あんな人のどこが良いのですか」といふ質問に、先生は「大きな声をする

な、聞える」とあわてられた。本当にわたしは先生の弟子ではなかったと思ふ。この時も萩原さんは呑み、田中さんは呑んでいられたらよかったようだ。

*

歌集戦後吟 詩集悲歌が出る一年前、

（三十年二月）歌集戦後吟を出された。戦後吟とあるが、内容は年少吟（昭和五十八年）戦中吟（十七―二十年）戦後吟（二十一―二十九）の三篇からなる袖珍本である。

草ねむはわがふるるとき葉を閉つるそをか
なしみて幾分かぬし

なれと見しシソガボールの稲妻はまたの日
たれを照らすあかりぞ

ながなみだそそぎてたびし茉莉花日かずへ
ぬれば枯れにけるかも

兵營に消燈喇叭の鳴るときし南十字はかた
むきにけり

スマトラのメダンのまちなをこふとひとは
知らねばものいひにけり

「昭和二十年の終戦当時は二等兵として河北省の唐県にをり、やがて望泉へ撤退、十

月末現地除隊として北京にゆき、ついで天津に移った。在留日僑の送還がはじまつて、翌二十一年二月末、佐世保着。」(詩集悲歌のあとがき)とあり、田中さんの在支のあらましを知ることが出来る。

薔薇十四号に送って下さった「夏」と題する一篇をこの際再録して思いを新たにしたい。

また夏が来た

この気候で私は思ひ出すのだ

華氏百二十度の華北の兵舎の生活を

しかし苦しかったの暑さのせいではない
気候が乾燥してゐる上、兵隊の私は上半
身裸を許されてゐた

苦しさを与へたのは人間だ

上等兵、兵長、伍長、軍曹、少尉

みな一様に私に敬礼をさせ

さうしてみな一様に私を打つのだった

私は男なので打たれることなぞこはくなく

いし

また打たれたってさう痛くないのだ

しかしかく厳格なしつけをする軍隊が

ありながら
いたるところの島々で玉砕しつづけてゐた
それが私の皮膚にヒリヒリとひびいて痛んだ

私は田中さんこそ草莽のかなしみを知る詩人であり、詠うころのあわれとみやびを心得た歌人だと思ふ、戎衣の臭を出でて濃く不楽しくも咲いたすみれ草にもたとえてよいのだらうか。兵士のうたにはかつてきびしい写生直叙の方法が待っていた。直叙は空虚であつた。それははげしく、いかめしく、女々しいことを許されなかつた。しかしそれはそれとして立派な兵士の歌があつた。私はそれを否定しないが、写生派の歌はついにほんとうのころの底も、冷たい客観性の表出に制圧される不幸を感じた。歌のいのちはそのもう一步の高きにあるのではなからうか、「草ねむ」の可憐なきまを見つめ、同じ稲妻がまたの日、たれを照らすのであらうか、私は過剰なセンチメンタリストとなつて、とめどなきものを覚えた。

歌は一首一首が辞世だと昔から云われる。

ているが、それは延々と永遠につながる歌のころか、いのちか、しかも底に炎ゆる火の痛ましいうつくしさが秘められている。ふるさとに花散ることも何ぞ一べんの叙景にとどまるであらうか。

柳子の葉の蔭におもはむながおもてこよひ

うれひをおびてうつくし

さらば稚児ら汝とながちちと汝が母とそを

まもらんといでたつわれぞ

バナナをと手紙をくれし史ゆゑバナナをは

めばなれをおもふも

人のすがたと惜のうつくしきはなまなかに写せるものではない。歌は妙なる音を出す楽器である。奏でる人の情によってのみ永遠につながるしらべが生れる。

瀬戸にそび並木路ありゆきめぐりわがゐる

こともゆめのごとしも

サルタンに王宮をすぎわが友らたむろせる

野にちかつきにけり

海こえてわが来しときに船追ひてとびしま

しろき鳥はありしか(以上戦中吟より)

淡々と、またひょうひょうと流れている悲嘯の中に、咲く花の匂うがごときものがある。ここでは三十一字はもはや無きに等し

い。稚いと言えば言え、類型だと言えば言え、吾はただうたい悲しんでいるだけである。私は歌人でもなんでもないんです……と声がするのである。

*

戦後吟にうつる。

北支那のなつめ林にわがいのち棄つばかりしをかへり来しはや

国破れて……歌あり。の感慨を軸とした

思い出の歌章が綴られてゆく。正に古事記に

ある「思国歌」(望郷の歌)を想い出す。

たたかひに出でゆくわれを知りしときすな

はち身をばまかせしひとか

むらさきのひともと摘みてかざしにすいつ

の日またも会はむをとめぞ

この土にたたかひの火のもゆるるときなれと

ひそまむ林はいづこ

おもふことなき世なりせば山の辺のみささ

ぎ守りてあらましものを

一つ一つ草木のたたすまいがよみがえつて

来て、くれない色の相聞となつて口吟まれ

寂かな感動は全身的な嗚咽となる。

歌ころあるものは死ぬ最後に辞世を詠む。星一つの兵士も將軍も死にゆくいのちには変りはない。心ある写生歌人は清い山河を客観のうちに眺めて述志のしるしとした。だがそれよりも大和うたのみやびを知る詠み手は寄物陳思と言うよりは正述心緒と言えればよいか、たくましいロマンを謳った。何とくらびやかではないか、かなしみが深ければ深いほど昔烈に焔が炎える。死にゆくいのちは何の仮借が要るものか、所詮いのちはやさしく、歌ははかないものとするゆえに。

この日々を海にいきなの卵流るわれが生命も手らにかよへる

われに二目おかせし独立工兵はコレヒドルに血にあへけむか

かつて吾をうちし伍長はこのゆふむくろとなりてかへり来しはや

あかあかとあだのたく火を見やりつつひところさじとわれは誓ひし

わだのはら千里をこえてたより来ぬわがふるさとに花散りぬると

海の日日に流れゆくいさなの卵に托したいのち、独立工兵の死、伍長のむくろ、あかあかと仇のたく火、に必死のころが向けられ

秋立てる大和国原ひととゆきみちのきはみに消えゆくかましを

ヤマトヲグナの御子も東征を了わつてここに來られた。そして歌われた。

たたなづく青垣

山隠れる 倭し 美し

たたかひとは何か、たたかひに破れた人の心は何か、このうつろの中に次第に蘇生してくるもろもろの想いが、いま薄紙を剝ぐように次第にあきらかになつてくる。

比良山のふもとをめぐりわかれこしなれを

おもへばみさごとびかふ

焼けあとの芽生えのごときわが胸のちひさ

き青きものを踏ますな

うなだれてつつみの道をゆきしとき青くち

ひさく咲きし花はも

うらがなしなにのさだめか汝とわかれ近江

篠原しぐれみる身ぞ

血に塗へて死ぬるよそびとあはれともいはぬ

ころにわれはなりにし

しかしながら敗戦の傷心は日に日に深くしのびよつてくる。いつ果てるともなきそのくやしき、かなしみ、佗しき、惨々として続きゆく毎日もほんの歴史の一瞬かもしれぬ。し

かしいまある限りの抒情をふりしほって号泣
するこそ、詩歌につらなるもののみが知る栄
光かもしれない。

ふたりしてのぼりし山のものはぬ殿いはいにぞ
よりに泣くべかりけれ
かぎりなくおつるなみだぞ若草の丘べにひ
とりわがゐたるとき
まなこあげ遠くゆく船ながめぬわがかな
しみのほつるはいづこ
にがよもぎな苦くしありぬ国ほろびこひにや
ぶれてまぢに飲むとき

*

年少吟　うら若き日の歌まなびは雖まつ
りの遊びにも似るいたいけさと、愛しみがあ
る。目標のない恋のおもいがあけぼのの雲の
ようにひろがる。だが歌の良さの芯をつかま
えることはむづかしい。歌法に正統と云うも
のがあるのかないのか。萬葉から貫之、それ
に俊成定家と来て、そこに何があるのだろうか。
か。正統、そんなものはない。それはめいめ
いの発願にかかるものだ。しかしはずれてい
れば人には判る。正統な歌まなびはまぼろし
のようなものかもしれないが、また巍然たる

少年記

奥道裕彦

少年のころに燃ゆる遠き日のラインスロツ
トわれが放つ伝書鳩

蟻螂を醜しと潰す友情は裏切られつな思
慕の燃ゆ

ローランが角笛鳴らす武勲詩山の少年の口笛
澄みつ

わが削る櫓の木刀のかぐわしき武勲詩一口
吟みつ

黄金なす丘の城址へ駈けのぼる童顔光り日輪
は燃ゆ

銅鑼打てばアレクサンドロスの瞳は澄みつ山
下りくる少年のあり

向日葵の金冠キラキラ少年の瞳の金いろ夏を
あふれつ

大空に鷲が輪を描く王冠へ少年われが金弓放

ものがあるようだ。

あけぼのの光のなかに目ざめるぬなをかな
しむと吾はのこされし
かなしきは遍照光へんしょうくわうの消ゆる見つつちちはは
の国にわかれいづるも
とりとめもなき如き息の中に微塵となつて
上っているものがある。詠みびとの心のすが
たは見えるものには見え、見えないものには
見えないのである。

ゆくさきをまじめに思へばなみだ出づゆで
たまごをば食はざりにけり
この村はにれの高木の多くあるけふをはじ
めて屋根にのぼれり
幼恋せきなこひおもひもいづるそらまめの花はさかり
となりけらずや
蕩の葉もいろづく壁に朝日さしきみがねむ
りのさめんとするか

私はどこかで「赤光」を口ずさんでいた。
おそらく作者もそんな気持はあっただろう。
あの血汐の滲むような日の茂吉にあのかたち
で歌わせたように
うれひつつ道を来れば十月のもみづる山に
ちかづきにけり
まなかひの丘ののぼりに家はあり百済王家

つ

甲蟲の臭いしみたる掌が光り少年は育つ黄金
の真夏を

蜻蛉釣るやんまの両眼光りつつ少年の隻手虚
空をめぐる

森ふかくもとめし鹿に征矢放つ初夏の日をわ
れは育てり

わが削る櫓の木剣エクスカリバー初夏なれば
金色のまぼろし

* * *

インルデ恋うトリスタンの瞳は碧しまがなし
き日よ野を放浪えは

掻き鳴らすニーベルンゲンの歌杏し雨降る窓
にギター吊られいて

もたえにけるかも
鐘鼓しやうこならし祭の群のゆきしあとひとりわ
れは行きにけるかも

「ふるさとと遠きにありて思ふもの」と屏
屋詩人は曰った。至純な口吟は今ふるさと
土に立つてありあり郷愁を語らせている。

散髪さんぱつのあとにあたまをあらふ水しみてつめ
たし秋に入れば
まっ暗き檜林ひのきはやしをあゆむときひところさむと
ひそかに思へり

風寒ふうかんき枯草原の起き伏しのかなたにひとは
あゆみゆきにし

この道を泣きつつわれのゆきしことわがわ
すれなばたれか知るらむ

少年の日は老い易い。くれないの日はまた
たくまに茶褐色になり、灰色となる。されば
こそ私はこの露けきのちの急ぎをうつくし
く思う。

(未完)

キラキラと金に輝く蜂めぐり少年の瞳は爛々
と燃ゆ

湖の姫のまぼろし霧ゆえにわが恋やます少年
の日の

年上の少女に寄する思慕あましその黒髪のか
ぐわしきかな

野の沼に嗔びし声のひらら啗ち天翔ける怪鳥
メフィストフェレスか

日輪は運行止めたりローランの死を悼みわれ
ら十字きるとき

神託はヘルサレムへ征け少年の胸帷子の
香き十字架

少年の胸帷子の十字章汪洋として帰り来らず
春鷲はるたねぐ運命とは知らず聖女らが碧澄める瞳に
銀の十字架

北大阪支部一月(十五日・安藤宅)
新しき年明けにけりロンドンの鳩はテレビに
高らかに舞う 泉 栄子
紀の国にわが得し鳥菜の種一つ蒔きてひそけ
し今年の正月 安藤 佳光
同 二月(二十二日・安藤宅)
寒林を縫いゆく鶴ひよこの声徹り鴨より他の鳥影は
なし 渡辺 郁夫
娘とわれと旅の屋敷を分けあえば幼き頃の笑
顔うかびぬ 安藤八千代
近代化の資金借らんとわが来れば元憲兵隊の
建物古し 大倉 親英

芹・夙短合同新年歌会・一月十四日夙川公民
館に開催、新春らしいきらびやかな雰囲気
の中に紅白競詠を行い両短歌会の交歓をし
た。
世界のまほろば日本元旦の陽のさす卓へ地球
儀をおく 藤井 悦子
こども亦宅地とならん山裾の荊田の上に土砂
おかれたる 須田 静江
海月浮く暖流の岸歩むとき我の心の潮騒を聞
く 八木 敏子

いのち秘め木々ことごとく光りあう冬風ぎの
日は雲もあたらし バハット幾子
芹の会二月(二十五日・鳴尾公民館)
探り合う言葉の重みに耐えて来て風花舞う庭
あらあらと掃く 備岡 直子
及ばざる思索の淵に佇ちながらただせかせか
と編みつつけいる 西崎 利子
四季感を喪いし貌群集のひとりとなりて地下
に吸われゆく 須田 英子
言葉すくなく別れ来りて甘栗の匂いただよう
街角をまがる 浜野 末一
伊丹正月歌会(十四日・伊丹文化会館)
深泥池の名にも似ずして水澄める池畔を行け
ば馬くぐりけり 中井 松恵
永遠の眠りにつきし墓石の下湿潤の果つる日
知らず 大路 晴子
障子はり漬けものをつけ常凡の女の幸を今に
して知る 小原みつ子
伊丹二月(四日・伊丹文化会館)
三才の孫と昇りし広前に大和舞まう住吉の巫
女 中井 松恵
記憶力半減したりつくつく巻録の言葉始めて
わかりぬ 塩谷貞一郎
同 三月(四日・伊丹文化会館)

吾を呼ぶ人の声にも艶ありて春の近きを身近
に感じぬ 樋口 英一
針供養針やすませんとお茶をたて琴などひき
て一日を過ごす 安部喜久栄
美しく歩くと意識して三步百舌の鋭声に姿乱
るる 足立つね子
夙川二月(十一日・夙川公民館)
遺されし一つの懐炉吾が肌形見となりて温
もり伝う 新宅いとの
訪なうる人なく暮れる雨の日の土にこぼるる
山茶花のはな 岸本のお子
冬木立すがれし肌に触れあいて空しき愛の風
に泣く 亀井 裕子
同 三月(十一日・夙川公民館)
病院の夜半のしじまにつと目ざめ夫の寝息の
あるをたしかむ 芝崎 愛子
蕾かたき桃に菜の花添え活けて人待つ今宵月
の入り来る 三栗谷文子
瞬間に比べる目となる女を見て女の性と思え
どかなし 吉村すゑ子

次号 切 四月二十日

近刊

前川佐美雄序・野尻弘装幀
歌集 海の族 埜 沢 宏 著

相聞の歌を中心に、三十歳前後の作品約四百八十首を
収む。著者は大阪読売新聞社文化部次長。日本歌人編
集委員・四六版二百二十頁 定価八百円
やし ま 書 房 刊
申し込みは大阪府枚方市香里ヶ丘五の三C十一の一
著者宛

近刊予告

村上 新太郎 著
歌集 緑夜

第三歌集として上梓・目次抜萃・〈吉野〉〈紅葉集〉
〈出雲〉〈くれぐれのうた〉〈春怨〉〈朝の虹〉〈わ
が冬の日に〉〈冬のかなしみ〉〈落花しきり〉等・B
6判上製函入・約三九〇首・価九〇〇円 千七〇円・
初音書房刊・申込所・薔薇短歌会

薔薇短歌会略規

- 本会は短歌を中心とする文芸結社で隔月雑誌「薔薇」を刊行し会員に頒布する
- 本会は村上新太郎が主宰す
- 会費A(同人)一年 三六〇〇円
- B(準同人) 二四〇〇円
- C(会員) 一二〇〇円
- D(購読会員) 六〇〇円
- なるべく三カ月以上前納の事
- 長期療養者並学生にして申出あれば半額とする
- 詠草(二十首) 原稿紙使用のこと
- 原稿次号締切 四月二十日
- 添削・一回十首以内添削料二〇〇円
- 宛名明記切手貼附の返送封筒同封の事

昭和四十二年三月二十日発行

編集発行者 村上新太郎

西宮市北口町五十七番地

発行所 薔薇短歌会

振替大阪三六四〇六番

電話西宮(一)一五三九番

大阪市都島区高倉町三ノ二一

大坂 安 藤 葉 局

電話大阪(四)〇八八〇番

印刷・株式会社スリーパー印刷

短歌雑誌 薔薇 第91号 昭和42年9月20日発行 (隔月刊)

村上 新太郎 編集

薔薇

1967-9
No.91



短歌雑誌
薔薇

第九十一号

(昭和四十二年九月二十日発行)

本号特価 一五〇円(送料三十五円)



秋の月 白樂天 田中克巳 訳

小さいあづまやの門は月に向って斜めに開いてゐる

庭いちめんの涼風に庭いちめんの苔

この屋敷は琴をひき愁しい思ひをするに適してゐる

一晩きみよ 琴を抱いておいでよ きつとだよ

(原詩題「楊家南亭」記者と同じく満五十六才の秋の作)

第九十一号目次 (一九六七年九月)

草館批評集

「草館」の位相について……………初井しづ枝…7
 作家の秘密……………米田 登…8
 ○……………宮野 佐登…9
 「くさやかた」の印象……………山田 木味…11
 「草館」によせて……………大倉はる子…11
 ○……………坂本 勝子…12
 籓底雑記(II)……………村上新太郎…1
 作 品……………同 人…2
 黄 薔 薇 集……………師岡 直子…14
 吉野秀雄先生を憶う……………吉見 芳子…16
 薔薇作品鑑賞……………大路 晴子…17
 作 品 I……………池田田鶴子…20
 作 品 II……………平野 八重…22
 有馬歌会記……………車本 光子…28

表紙・カット…竹中 和 一 部
 カット…津高 和 一 部
 須田 剋 太



薔薇 No.91

籓底雑記 その十一

萩が花尾花葛花撫子の花
 女郎花また藤袴朝顔の花(山上憶良)
 * これ 秋の七草の起りとも言う

* 昭和十一年(東京日日紙上)新七草の賦の企てに依えて

- * 時雨女史が雁来紅 菊池寛がコスモス
- 曼珠沙華は斎藤茂吉 おしろい草の晶子
- 牧野博士の菊 赤のまんまは虚子
- 秋海棠 (異名 断腸花) ……荷風

* 選ばれた花 選んだ人の想いを偲ぶのも又一興

* 春夫が備忘にとどめたる
 からすうり ひよどり上戸 赤まんま かがり
 つりがね のぎく みつひき
 * なども つきせぬ秋の野の夢 歎
 * さて諸賢よ 秋風と共に己が自在の七草を
 落ち葉が上にしたため給え
 (村上新太郎)



品 卦